

北海道大学

ヒマラヤ遠征隊



御挨拶

北海道大学ヒマラヤ遠征後援会

会長 杉野目晴貞

「ボーイズ・ビー・アンビシャス」。この言葉を残して故クラーク博士は札幌の地を去りました。このクラーク博士の教えと開拓者精神を身に付けて、数多くの学生が社会に送り出されてきました。

昭和二年に発足した北海道大学山岳部も、このクラーク精神と、開拓者魂にきたえられた沢山の岳人が育つて来たのです。部発足当時の先輩から海外遠征の夢が培われ、そして後輩に受つがれ、育つて来ました。それが、北極に、南極に、アラスカに、そして又ヒマラヤにと先輩を海外遠征に参加させてきて、今回、北海道大学独自のヒマラヤ遠征隊の派遣となつて、大成を見るにいたつたのです。

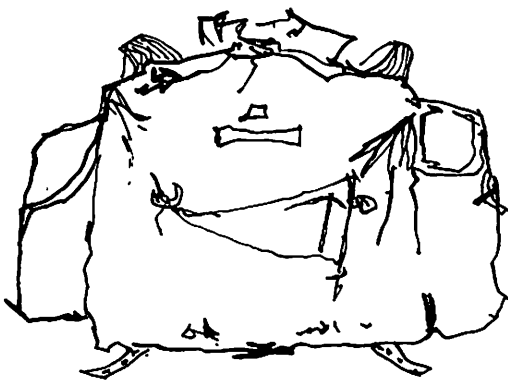
此度、各方面からの暖かい援助により、本年三月、中野征紀隊長をはじめとし、七名の隊員が、東北ネパールの未踏の高峰、チャムランの登頂を目指して日本を出発しました。全員初めてのヒマラヤ遠征という不利な条件の中で、色々と苦勞を重ね乍ら、五月初旬、山麓に到着し、約一ヶ月の間激しい登山を行い、五月三十一日、遂にチャムランの頂上に立つ事が出来たのです。

この成功は、中野征紀隊長以下七名の隊員の苦勞は申すまでもないことですが、それにも増して、遠征隊を絶えずはげまし続け、そして計画

を押し進めてきた北大山の会、北大山岳部の人達の献身的な努力、各地におられる同窓会の皆さん方の協力、そして学内、学外の多くの方々の心からなる暖かい援助、これ等の多くの人々の協力と援助が、今回の北大ヒマラヤ遠征隊のチャムラン登頂成功を総らせた、といつても決して過言ではないでしょう。

この様に、チャムラン登頂に成功と言う偉業は、多くの人々の力の集結によりなされました。遠征隊は、途中において一時音信不通となり、各方面の方達に御心配をおかけいたしました。が、八月初旬、中野征紀隊長以下七名の全員が、何一つの事故もなく無事帰国いたしました。

お世話になつた各方面の皆様は、チャムラン登頂成功の報告をもつてお札に替えさせていただきます。



登頂に成功して

北海道大学ヒマヤラ遠征隊

隊長 中野 征紀

モンスーンの到来を思わせる様な空模様は五月末、上の方のキャンプでは、あわただしい動きが感じられた。「大丈夫、成功する」そう自分に言いかけながらも一抹の不安は消えない。あの想像を絶する様な切り立った固い氷の屋根、そして最後のキャンプの上に行手をはばむかの様に立ちただかっている黒々とした岩壁、そして刻々と変りモンスーンの到来を告げる雲、これらのものが次々と頭に浮んでは消えていく。

「隊長！成功しました。第四キャンプの上に雪洞を掘り、三十一日の日に登頂しました。」「よかつたな、御苦労さん。」どんなにかこの一瞬を持つていたことだつたらうか。黒々と日に焼けた隊員の顔にその苦労の後がうかがえる。遠く日本に居るはげましてくれた先輩、同僚、後輩の顔々々が浮んできた。

思えば計画の当初より苦難の連続であつた。計画が具体化し、最初の目標として選んだカンジロバ・ヒマールは、昨年のブレ・モンスーンにイギリスのタイソン隊に登頂されてしまつた。目標をエヴェレスト南方の七・三一九米の未踏峰チャムランを選んだ。この山はエヴェレストに近い、ずい分古い頃より知られた山であるが、その山容の難しさのため、登頂を企てた数隊は、登路さえも見出せずに失敗に終つていた。

特にエヴェレスト登頂のヒラリー隊が失敗してからは、困難な山として有名であつた。我々はお出発の頃、西面又は、北面に登頂可能なルートがありそうだが、というわずかの希望を頼りにして出発した。

全員がヒマヤラ遠征は最初といつた不利な条件のため、色々と苦労が次から次に新たにぶつかつて来た。インド、ネパールのハン難な通関の事務を終えて、百数十人の大部隊でキヤラバンを開始した時は本当にほつとした気持ちになつた。キヤラバン後半に、例年のない雪に悩まされはしたが、どうにか全装備をベース・キャンプに集結したのは五月も十四日になつてしまつた。その後の登路の偵察、氷河上のルート工作、キャンプ建設は、晴天と全隊員、シエルバの懸命の努力によつて順調に行われ、五月三十一日、遂に登頂に成功することができたのです。

我々を送り出すために色々と苦労してくれた人達、そして暖かい援助を与えて下さつた各方面の方々に、お礼として登頂成功という何よりの御土産を持つて帰れた事を我々一同心から喜んでおります。



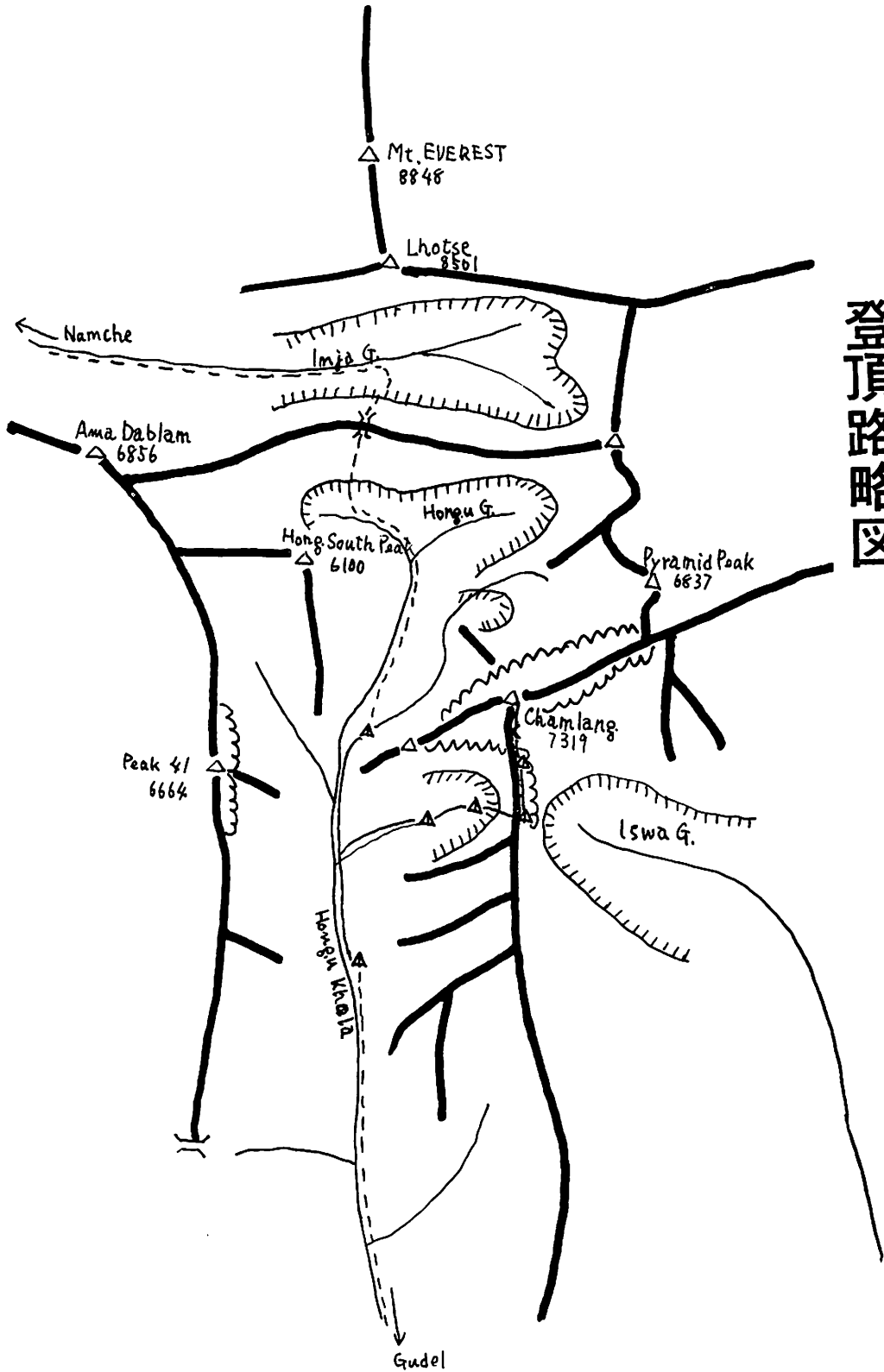
遠征隊日記

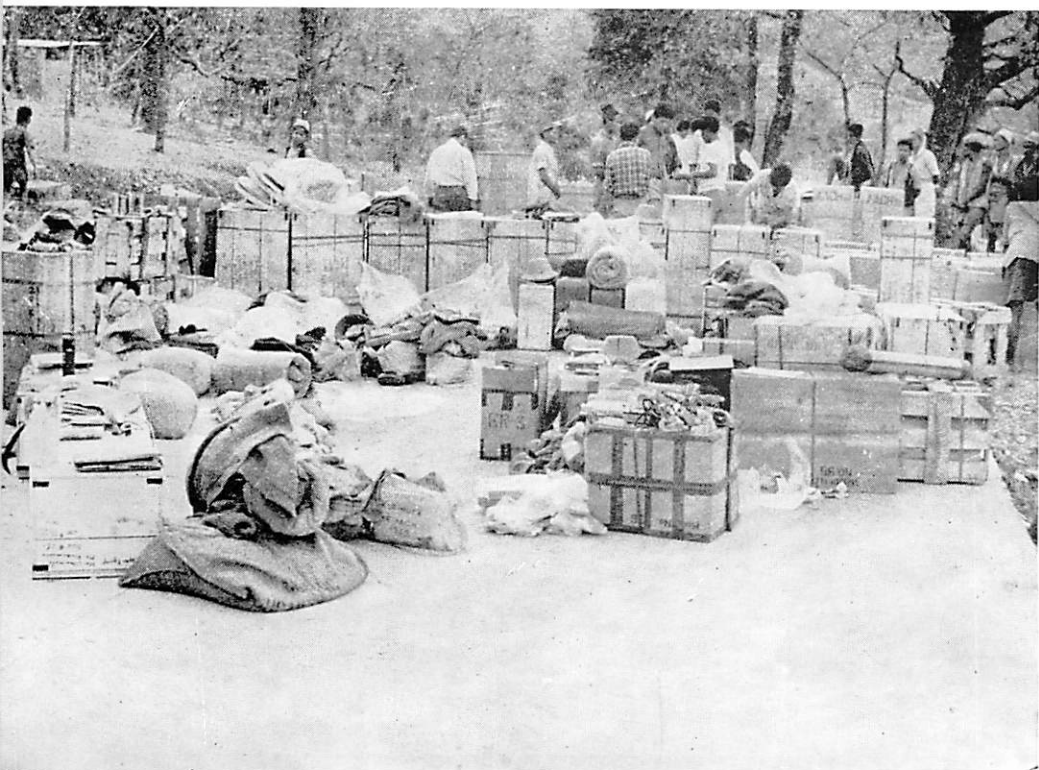
3月21日 東京羽田空港発
 3月22日 カルカッタ着
 4月9日 遠征隊荷物ネパール領シヨグバニ着
 4月17日 ダーランよりキヤラバン出発
 4月20日 先発隊先行
 4月22日 アルン河を渡る。
 4月26日 サルバ峠を越え、グーデル着
 4月27日 最後の部落チエミシンを通過
 5月5日 先発隊メラ・カルカ着
 5月9日 メラ・カルカ上流にベース・キャンプ建設
 5月10日 偵察隊チャムラン西側に仮第一キャンプ建設
 11月13日 チャムラン北西面、北面の登路偵察
 5月14日 チャムラン南尾根への氷河下に新しい第一キャンプ建設
 5月15日 氷河上に第二キャンプ建設
 5月18日 第二キャンプを移動
 5月20日 氷河を抜け、稜線上に第三キャンプ建設
 5月26日 第四キャンプ建設
 5月27日 第四キャンプ移動
 5月30日 アタツク隊稜線上岩壁上部に雪洞を作り泊る。
 5月31日 アタツク隊登頂成功
 6月1日 第四キャンプ撤収

6月2日 第三キャンプ撤収
 6月3日 第二キャンプ撤収
 6月4日 第一キャンプ撤収
 6月8日 グーデルより人夫着
 6月9日 帰途キヤラバン開始
 6月11日 アムブ・ラブチヤを越え、イムジャ・コーラに入る。
 6月14日 最初の部落バンボチエ着
 6月17日 ナムチエ・バザール着
 6月24日 グーデル着
 7月1日 アルン河を渡る。
 7月8日 ダーラン着、キヤラバン終了。
 7月31日 カルカッタ発
 8月4日 東京羽田空港着

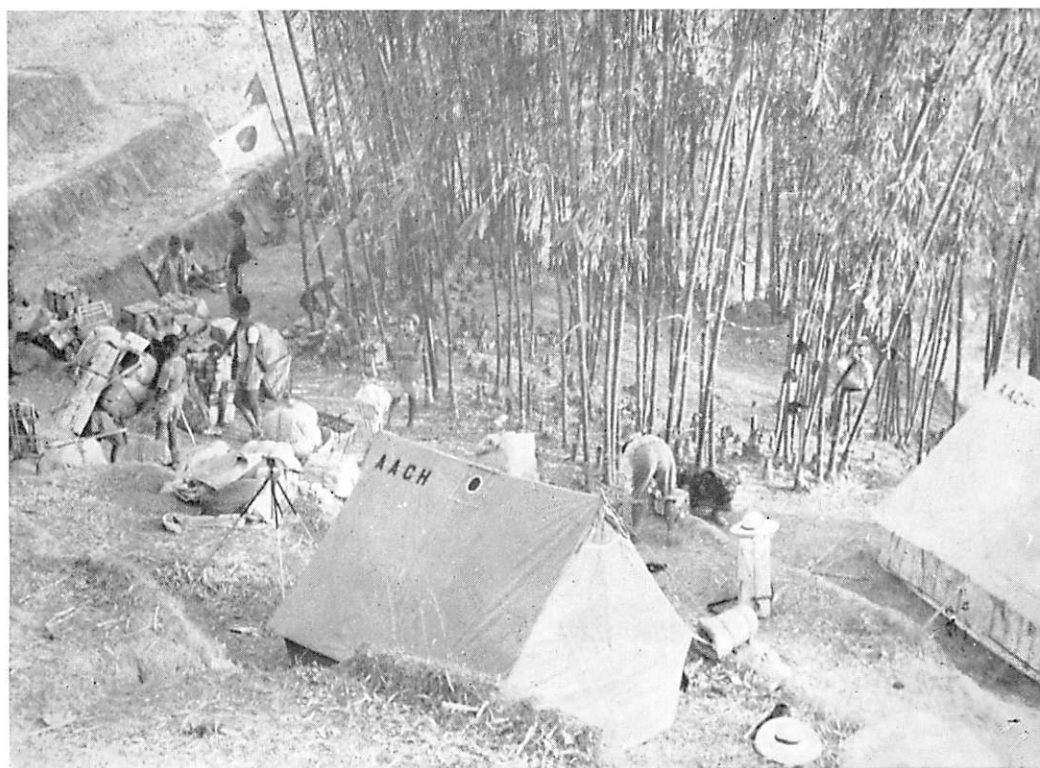


登頂路略圖





ダーランのフスレ丘にてキヤラバンの準備



キヤラバン途中段々畑の中でのキャンブ

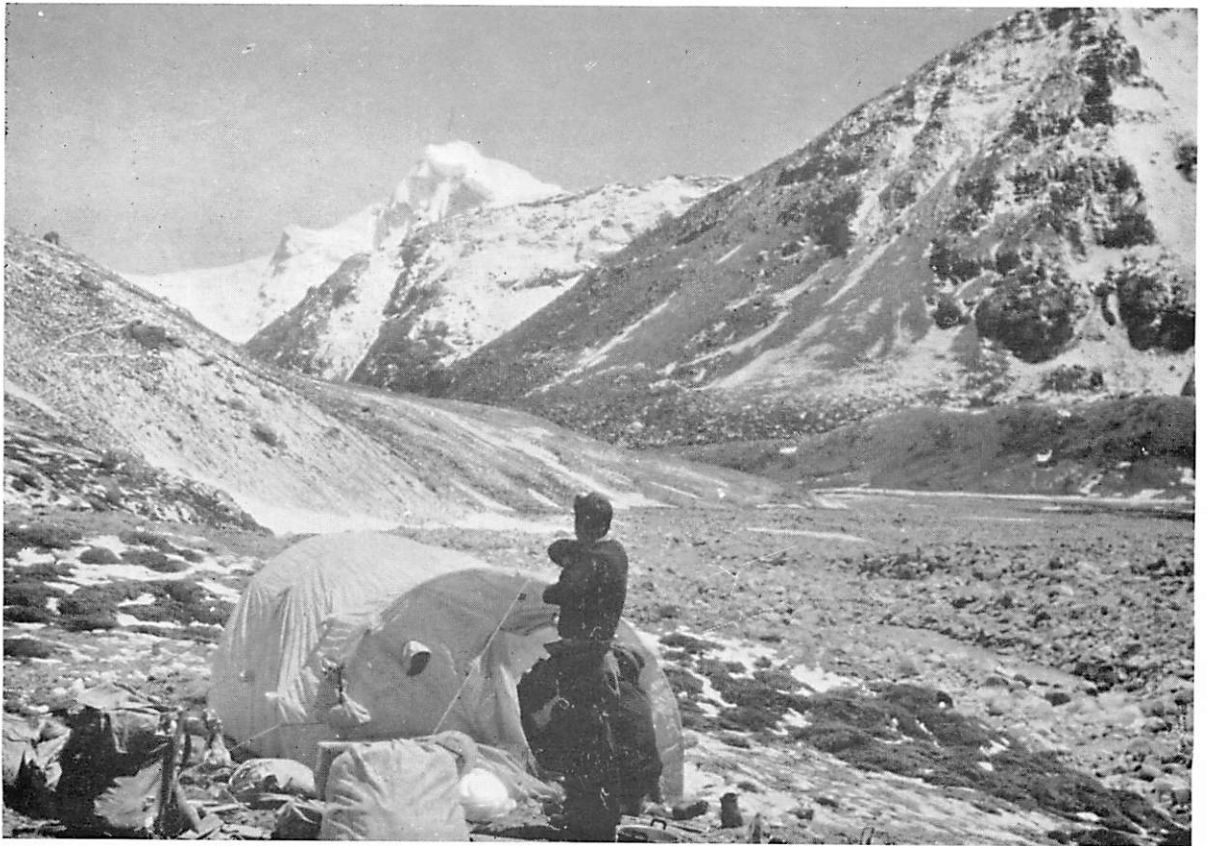
アルン河の丸木舟での渡し



ホング・コーラでの雪溪上を荷物を運ぶポータ



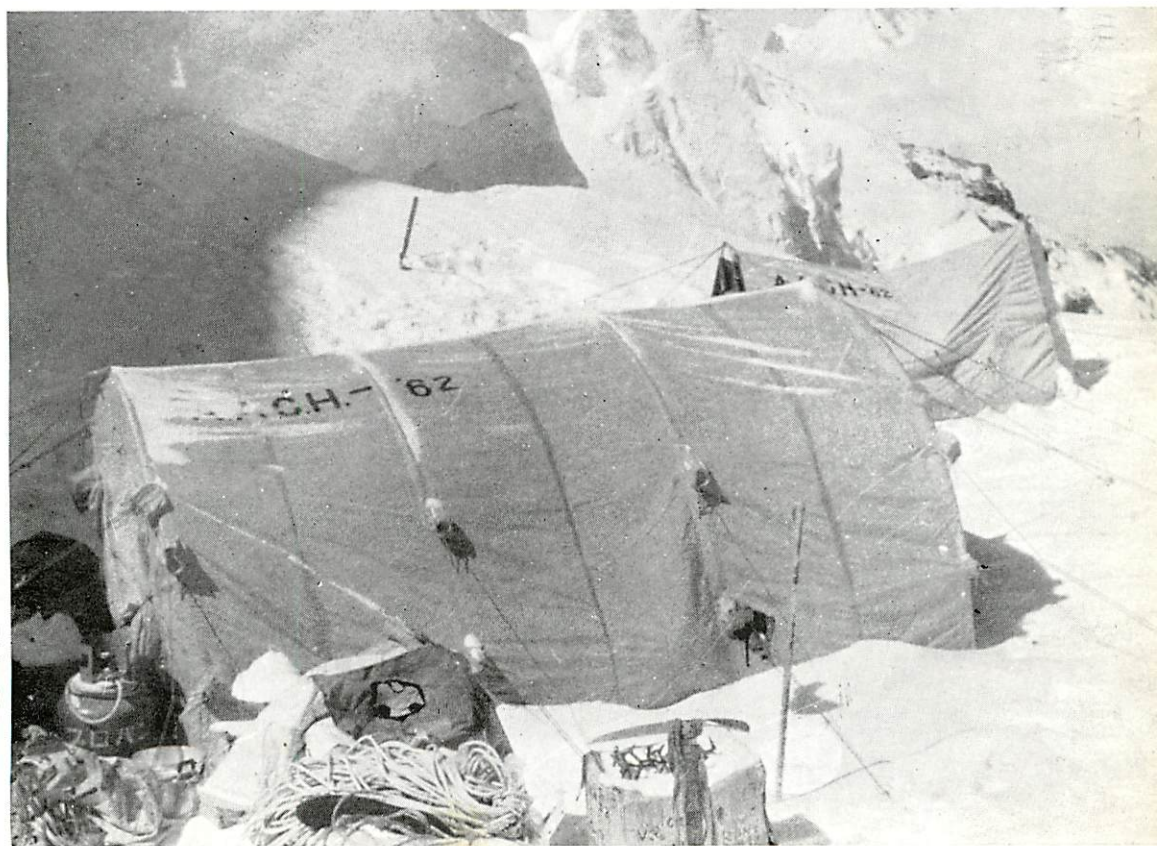
ベース・キャンプの炊事用テント



偵察キャンプより見たメラ・ピーク



チャムラン北面の登路偵察隊



氷河の真中の第2キャンプ

雪にうまつた稜線上の第3キャンプ



第3キャンプから第4キャンプへのナイフリッジ





第1キャンプより見た我々の氷河上の登路

① 第1キャンプ ② 第2キャンプ ③ 第3キャンプ ×印 旧2第キャンプ



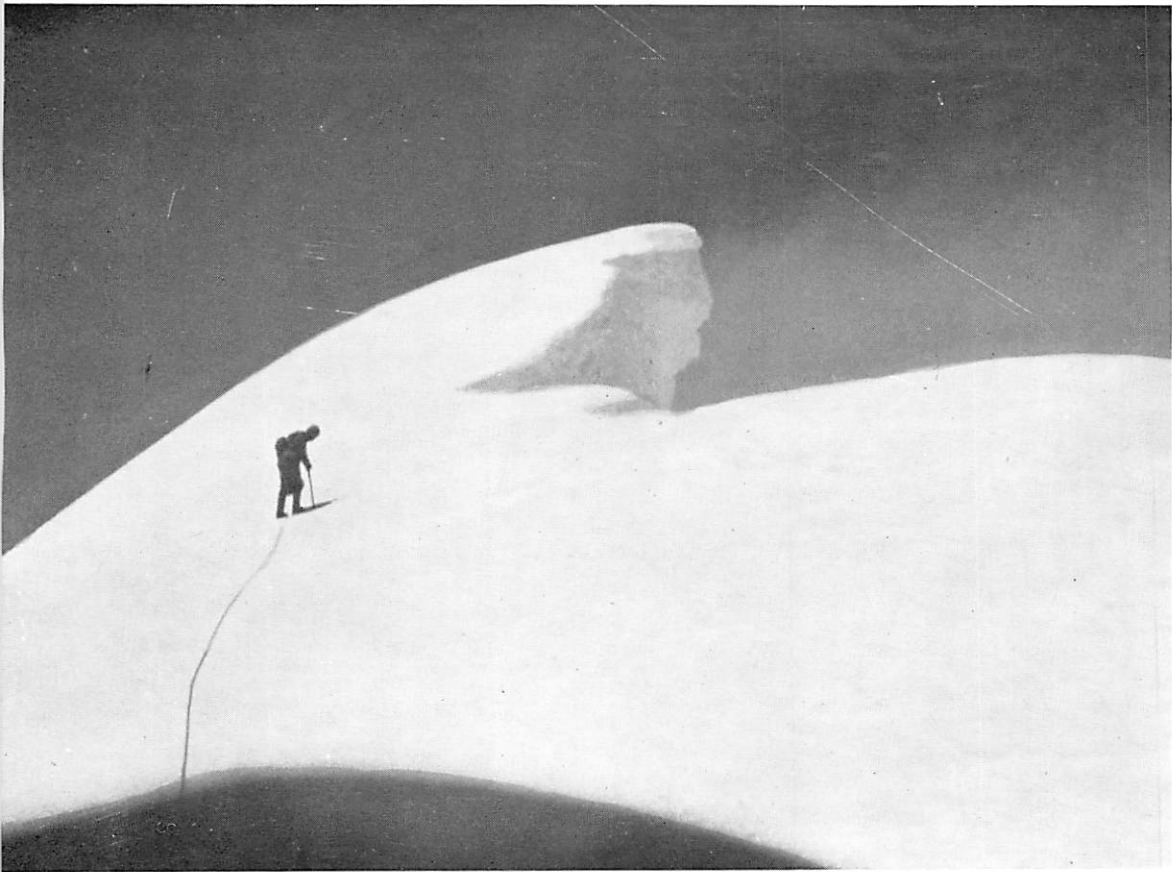
チャムラン頂上に日章旗をかかげるバサン・プタール
(撮影 安間隊員)



やせた氷の尾根を荷上げする隊員とシエルバ



ルート工作隊を第3キャンブより見守る隊長



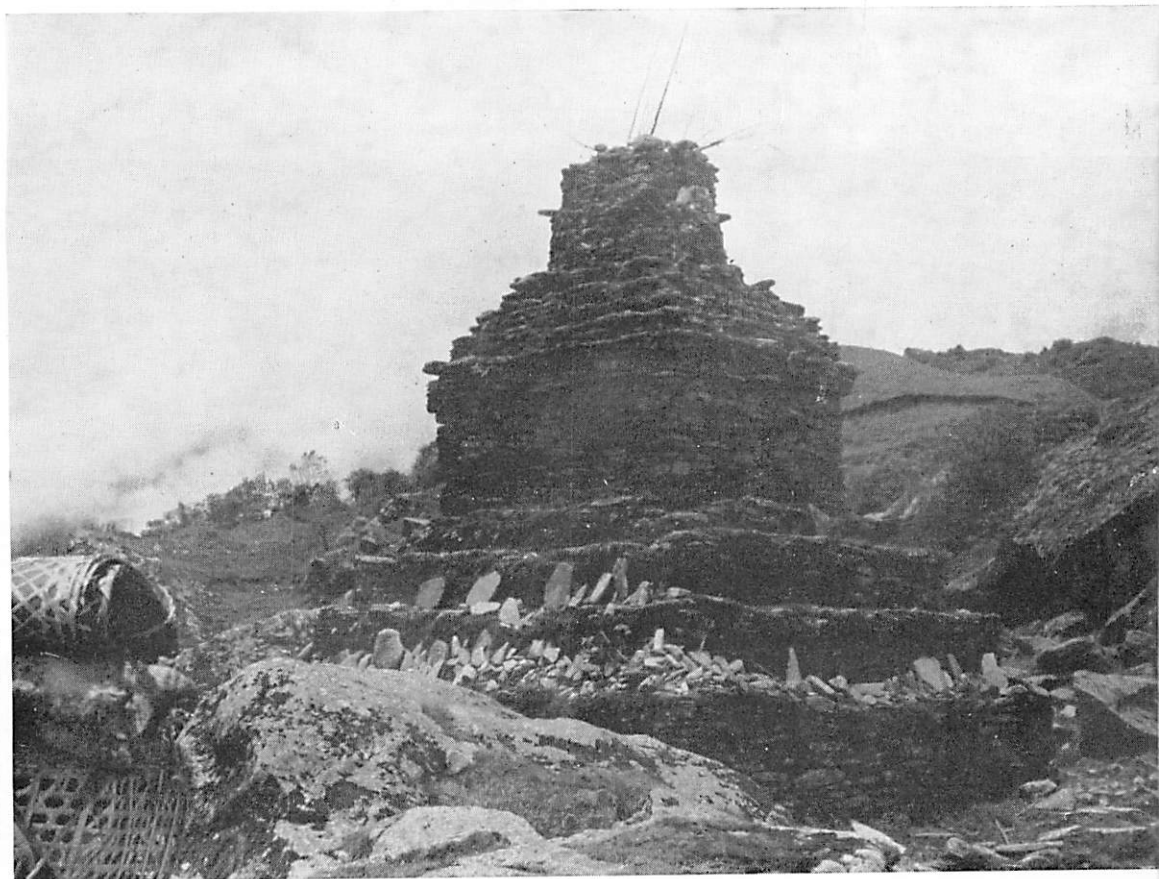
頂上附近の雪ヒ上を行く安間隊員



第4キャンフ附近より見たチヤムラン南稜とピーク6



ホングー・コーラより遠くローツエ・エヴレストを望む



チヨルテン（ラマ教のほころの様なもの）

シエルバ族の子供達（バンボチエにて）



シエルバ族最大のまつりドムジエの踊り





パンボチエより見た未踏の秀峰カンテガ

ヒラリー隊登頂の難峰アマ・ダブラム



御礼の言葉

我々の遠征は、七百万円を越えた大きな経費をかけた遠征隊でしたが、各方面より心からなる寄附や寄贈を載き、装備、食料等を完備し、事故なく成功でき、全員無事で帰国することが出来ました。これも御援助いただいた皆様のお蔭と心から感謝しております。失礼ながら誌上をかりてお礼申し上げます。

旭化成工業 K K
 K K いわしや高橋源三郎商店
 K K 今井
 エーザイ K K
 大内理化工業所
 小樽山岳会
 大塚製薬 K K
 小野薬品 K K
 科研薬品工業 K K
 門田製作所
 K K 富樫商店

大日本製薬 K K	大日本製糖 K K	台糖フアイザー K K	タイガー魔法瓶	第一製薬 K K	K K ソニー製作所	菅原工業 K K	新宮商行 K K	秀山荘	芝浦精糖 K K	秀岳荘	K K 資生堂	塩野義製薬 K K	K K 山晴社	三共製薬 K K	札幌幌市役所	札幌山岳会	K K 国分商店札幌支店	興和新薬 K K	好日山荘	クレドール興農 K K	極洋捕鯨 K K
日本冷蔵 K K	日本テンプル糖 K K	日本電機 K K	日本精密時計 K K	日本水産 K K	日本新薬 K K	日本酸素 K K	日本光学工業 K K	日清精油 K K 札幌支店	日魯漁業 K K	K K 二幸研究所	鳥居薬品 K K	東洋醸造 K K	東洋木材 K K	東京田辺製薬 K K	帝国人絹 K K	中外製薬 K K	チバ薬品 K K	田辺製薬 K K	武田薬品工業 K K	台湾製糖 K K	太平洋漁業 K K

野田正油 K K 札幌出張所
 芳賀スキー製作所
 万有製薬 K K
 藤沢薬品工業 K K
 富士ソリッドフアイパン K K
 富士重工業 K K
 富士製鉄 K K
 富士写真フイルム K K
 二葉製靴
 プロニカカメラ K K
 北海道
 北海道医師会
 北海道銀行 K K
 北海道新聞 K K
 K K 北海道相互銀行
 K K 北海道拓殖銀行
 K K 北海道電力 K K
 K K 北洋相互銀行
 K K 増新
 三井船舶 K K
 明治製菓 K K
 K K 桃屋

山之内製薬 K K
 吉田テント

ライファン工業 K K
 ワカバ衣料 K K

この他に、同窓会を始め、多くの皆様
 にお世話になりました。この誌上を借り
 て厚くお礼申し上げます。

なお、今回の遠征の詳細な報告は、北
 大岳部部報で発表いたします。

北大ヒマラヤ遠征隊事務局

北大ヒマラヤ遠征隊会計

収入の部

山の会・山岳部 九八万円
 隊員負担 一九〇
 同窓会関係 九八
 一般法人 二七四
 本州製紙関係 四六
 山岳団体 四四
 雑収入 一一
 計 七六一万円

支出の部

装備費 一五四万円
 食糧費 一六
 写真材料費 二五
 梱包輸送費 二三
 交通費 二四
 札幌事務局費 四〇
 東京事務局費 三九
 保険、登山料 二四
 外貨分(遠征隊持参) 四二二
 計 七五七万円
 残 四万円

飛行機・汽車・船

我々は都合により、タイ航空を利用した。乗込んだ飛行機は、双発の相場にボロイ飛行機で、出発が三時間も遅れてしまった。小雨降る羽田のエプロンで、見送りの人達が寒むそうにしているのが、気の毒でならなかった。

羽田を出発した時は、我々七人の他に、中国人らしいのが二人乗っていたきりである。定員五十人というのに、何とお寒い状態かと、人事ながら心配をしていた。結構よくしたもので、台北からは、香港行きの中国人がドヤドヤと乗込み、座席に寝ころんでいた我々も、起される羽目になった。台北、香港、バンコック、ラングーン、カルカッタと飛ぶ間、まったく、国際ローカル線といった感じで、次々と変った人種が、乗込み、そして降りて行つた。

どうやら事故もなく、インドの土を踏む事が出来た。インドからネパールへは、各隊員が、バラバラになつて入国することになつたが、我々は、経費節約のため、汽車に乗らされた。カルカッタの街には、ガンジス河の支流をはさみ、二つの駅がある。我々は河を一度渡り、ガンジスの支流を右手に見ながら北上した。我々の乗つた普通急行は、一等、二等、三等の三階級に別れていて、我々は一等に乗りこんだ。一等は、皆コンパートメントになつていて、窓、入口には内からかかる鍵がしてあり、窓には鉄杭子迄してあるのには驚ろかされた。しかし、途中の駅々の、物売りや、しつこい乞食の激退には、この嚴重なコンパートメントは、ずい分役に立つた。

我々のは行きの時は、「生水、怪しげな食事は一切するな。」という事を言われていた。どの食物を見ても、怪しげな感じがして、行きにはとうとう、果物とジュースで、丸一日を過ごしてしまつたが、帰りには、大部現地の食物を口にしたので、「これは食える。」「これはいただけない。」と、覚えた事と、買い物をする位の現地語をカタコト乍ら、しゃべれるようになっていたので、丸四日の汽車旅行も（ピラトナガール・ダーリン・ニューデリー・カルカッタ）結構腹をすかさずに過すことが出来た。

汽車が、砂漠のような所で、カタンと止ると、赤い上衣をきて、赤い布を頭に巻いた人夫が、バツタの様に、飛びこんできて、うっかりしていると、荷物が皆、運び出されてしまう。あらかじめ、人数を決めて、コンパートメントに入れないと、人夫間で、喧嘩が始まる。皆が、テクテクと砂の上を人夫に遅れないように歩いていくと、川岸に、アメリカの開拓期にミシシッピ川を走つていたような、水車のようなのがついた蒸気船があつた。まったく時代がかつたような船で、一たん川岸に沿つて上流に上り、そして流れに流されながら、川を渡るといつた具合で、モンスーン期（雨期）には、どうなるだろうと心配をしたが、帰りは、幸い鉄橋のある所を通つて帰つてきた。

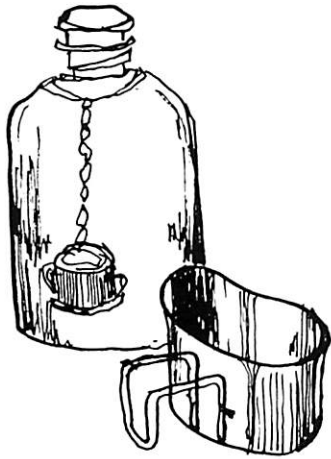
ネパールに入つてからは、川の渡しは、もつとひどく、長さ十米位、巾七・八十程の丸木舟で渡るのである。空身では七・八名乗せるが、荷物があると半分しか乗れないのだ。川巾四十米位の所であつたが、我々の百人の人夫を渡すのに、丸一日かかつてしまい、終りの方では、疲れて力が抜けたのか、だんだん下流に着くような始末だつた。

国営とかだそうだが、五十ネパール・ルピー（一ネパール・ルピーは

邦貨の約五十円)を請求されたが、値切つて十ルピーと煙草二箱にしてしまつた。とんだ国営事業もあつたものだ。

帰りは地図を頼りに、目的の渡し場に着いたのだが、モンスン中なので「オヤスミ中」という場所で、上流の方迄、飛んだ廻り道をさせられてしまつた。

ネパールでは乾期とモンスン期とで街道ががらりと変つていくことがある。乾期には、河の岸にそつてずんずんと登つて行き、適当な所で屋根を越し、又河岸に降つて岸沿いに歩くといつた具合だが、モンスン期にはほとんど河岸を歩く事がない。河岸を歩く時もずい分上の方に道がついている。モンスン期の道の大部分が屋根道であり、丹念に屋根の上を歩くので、上り下りが多いのには、すつかり参つてしまつた。乾期には谷、雨期には屋根とまつたく眺めの悪い道であつた。



北海道大学ヒマラヤ遠征隊記

昭和三十七年十二月発行

事務局

札幌市北八条西五丁目

北海道大学理学部

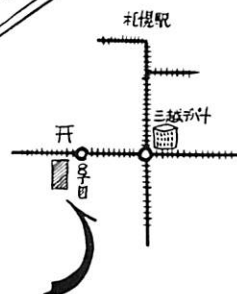
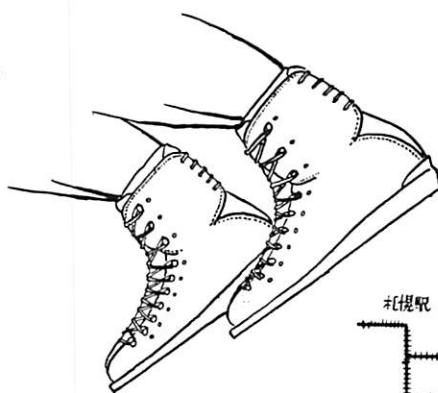
地質鉱物学教室内

印刷

興文舎印刷株式会社

山・スキー靴

靴のことなら…
ご相談下さい



● 札専通帳をご利用下さい。

三浦靴店

サッポロ南1・西8電車通り TEL ③0901④8552

天 下 一 品



キッコーマン 醤油

宮内庁御用達 野田醤油株式会社

味つけならお味がさへんぞかし





本場の味

サッポロ

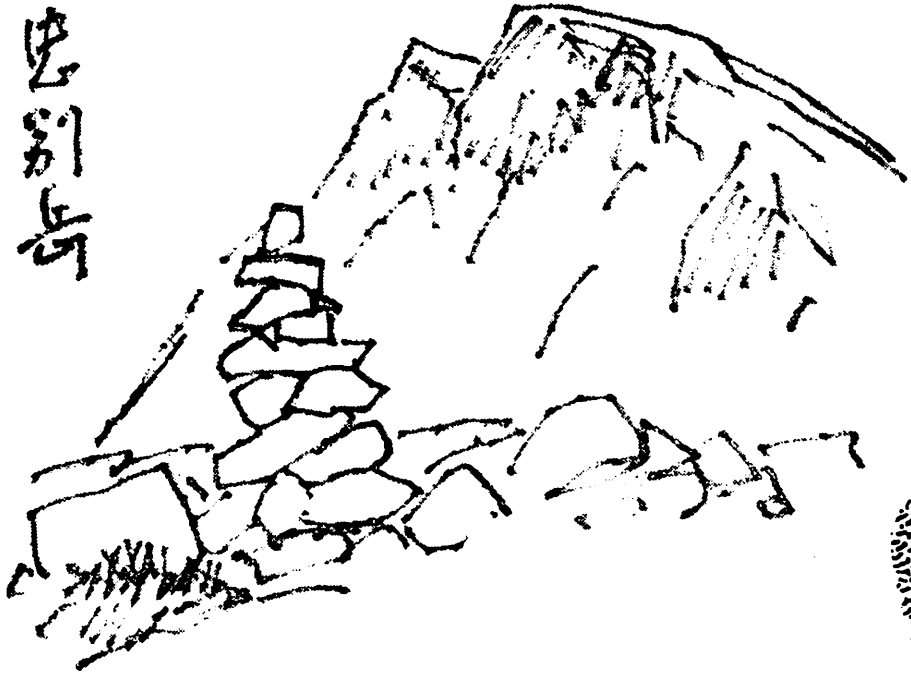
世界のビール三大名産地

Munchen (ミュンヘン) — 札幌 (サッポロ) — Milwaukee (ミルウォーキー)



姉妹品 リボンシトロン・リボンジュース・リボンコーラ

忠別岳



北海道の山と店

秀岳荘

金井五郎

札幌市北13条西4丁目

T⑦2346・8739



**PICKEL
UND
STEIGEISEN**

SAPPORO

KADOTA



特撰おみそで
栄養を！

みそは

三六五日あきぬ味



佐渡・天然熟成

マルダイみそ



● 通のニッカ
味のニッカ



ニッカウヰスキー株式会社

贈って喜ばれる

さんぱち ふハの銘菓



アマンドサブレ
アマンドの味
独特の味
生かした
風味を欧
南に近
たてに味
をま

ブレの滋
味の純
な菓子
焼いた
人タリ
をそす

「まちの木」

札幌、私達の街そして私達の街の
木ライラック・まちの木は上品に
焼き上げたウェハースの間に美味
しいコーヒーマニラ・ストロベ
リーなどのクリームをはさんだ純
フランス菓子です。



本社	札幌市南1西12	T② 2607	④ 1357
スキノ売店	札幌市南4西4	T② 0038	② 0510
十字街売店	札幌市南1西4	T③ 3029	⑤ 3344
サンデパート	(地階)南南2西3	T④ 5131	

おにどとの相肉の サニサイド

男		女		男	男
C		A		B	A
「熱	「人	「ど	「た	「リ	「香
い	で	つ	め	フ	り
う	喫	ち	だ	レ	だ
ち	む	に	ね	ッ	ね
に	も	し	」	シ	」
ね	の	ろ		ユ	
」	だ	一		の	
	ワ				

えぞ山岳会
連絡事務所



ni

北2西2
Te (2)6470



銀鳳北の譽独特の
 酵母菌・ギンポウ
 キンが生みだした
 お酒の傑作です
 エキス分とアルコ
 ール分の微妙なバ
 ランス……
 その美味さをお味
 わい下さい

銀鳳 北の譽

姉妹品

玲鳳 北の譽

札幌北の譽酒造株式会社



わた
 *綿ふとんの
 時代は終った

ブリヂストンの

**エバーソフト
 エバーライト**

- ふんわりとしたすばらしい弾力です
- ホコリが出ないし、虫もつきません
- 打直しや日に干す必要がありません
- いつまでも使えるので、経済的です
- カルガルと持てます

 ブリヂストンタイヤ株式会社

日本工業規格表示工場



NO 8068

* ハガのヒッコリー・スキー



ハガスキー

・札幌・東京・茅ヶ崎・

